

< 2005年度の講義 >

1. 自然神学とその再構築
2. 「宗教と科学」関係論の基礎
3. 現代の環境論とキリスト教思想
 - 創造論と環境 - いわゆる人間中心主義について -
 - 自然神学の生命論と環境破壊 - 近代の諸相 -
 - 環境破壊の原因を問う - 欲望論 -
 - 環境破壊を超えて - ヴィジョン・希望・共感 -
4. 現代の生命論とキリスト教思想

3. 現代の環境論とキリスト教思想

4. 環境破壊を超えて - ヴィジョン・希望・共感 -

< 問題 1 >

- ・ 聖書の創造論と環境破壊
- ・ 環境破壊と欲望
- ・ 近代と欲望の変質 - 二つの近代 -
- ・ 環境論に対するキリスト教の寄与 - エコロジーの神学 -

< 問題 2 > 科学の時代とキリスト教

「天は神の栄光を物語り
大空は御手の業を示す」(詩編 19.2)

宗教と科学との対立？

日常生活の隅から隅まで科学技術に依存している今日、わたしたちは「科学とキリスト教」と言われてどんなことを思い浮かべるだろうか。ガリレオ裁判や進化論論争などから、科学とキリスト教との対立をイメージする人も多いかもかもしれない。しかし、この「常識的な見方」は一度疑ってみる必要がある。

最近、ガリレオ裁判や進化論論争については、実証的な研究がさかんに行われてきているが、従来、宗教と科学の対立の実例として考えられてきたこれらの出来事は、宗教と科学との対立といった問題ではなく、たとえば、ガリレオ裁判の真の争点は聖書解釈の方法論であって、裁判を左右したのは、ガリレオを取り巻いていた政治的対立であったことが明らかになってきている。コペルニクスもケプラーもガリレオもニュートンも、近代科学の創始者たちはほとんどすべて、熱心なキリスト教徒だったのであり、科学がキリスト教信仰と対立するなど考えもしなかったのである。

冒頭に引用した詩編は、古代イスラエルの詩人が、神の創造した天地、大空と大地と海の中に見事な秩序を見だし、それを創造した神の偉大さを賛美するという内容であるが、そのまま、近代科学を作った科学者の言葉と言ってもおかしくない。人類は長い間、宗教

と科学とは調和すると考えてきたのである。近代の自然科学者は、ただ単に自然現象に興味があったのではなく、彼らの意図は神が創造した世界の中に神の偉大さを科学的に発見し、それによって神を賛美することだったのである。

では、どうして「宗教と科学の対立」といった見方が今日の日本に普及してしまったのだろうか。おそらく、その原因の一端は、明治以降日本にもたらされた近代思想、とくに近代的な聖書理解にあったと言ってよいだろう。それは、聖書の創造物語を科学理論と同列のものとする考え方である。天地創造の物語を、生物についての科学的知識を与えるいわば生物学の教科書のようなものと考えるとき、科学的に進化論が正しいのか、創造物語が正しいのかということになり、進化論者は進化論が科学的に正しく、反対の立場に立つ人々は聖書が科学的にも正しいと、言い合う結果になる。しかし、こうした議論は聖書についてのまったくの誤解に基づいている。創造物語は科学理論ではなく、聖書は科学の教科書ではないからである。

創造物語のポイントは何か。天地創造の物語は、光の創造（光あれ）からはじまり、人間の創造で締めくくられるが、それを全体としてみるならば、そこに人間が生きている世界が一つのパノラマのように描き出されていることがわかる。メッセージの中心は、人間は一人で生きているのではない、人間は他の多くの生き物と互いに支え合って共に生きている、そして何よりも人間は神に絶対的に依存することによって人間らしく生きることができる、という点にある。ここにはとくに進化論に対立するような内容は見あたらない。重要なのは、人間は与えられた環境の中で様々な生き物と関わりつつ生きているということ、つまり他の生き物と共生する人間の姿なのである。

宗教と科学の協力へ

「宗教と科学の対立」が誤解であるならば、では、わたしたちは、宗教と科学の関係をどのように考えたらよいだろうか。

ポイントは、科学は目的を達成するための方法や手段を与えてくれるが、どんな目標をめざすべきかを教えてはくれない、ということである。科学技術は人間の幸福のために存在するとしても、では、科学技術によって実現しようとする人間の幸福とは何か。これは、科学の営みにとって決定的な問いではあるが、科学理論に答えを求めることができる性格のものではない。

それに対して、宗教の役割の一つは、たとえば、隣人愛の実現という理想・目標を掲げることによって、科学に方向性を与えることである。もちろん、ひとたび、目標が与えられれば、科学技術には、その実現に向けて適切な手段を提供することが期待できる。こうして、本来宗教と科学は互いに協力し合うべきものであることが判明する。これは、二十世紀最大の科学者と言われるアインシュタインが、「宗教のない科学はまっすぐ歩くことはできず、科学のない宗教は行き当たりばったりである」と述べているとおりである。

科学と宗教の協力の具体例として、次に環境問題を取り上げてみよう。

今日、わたしたち人類が抱える問題にはいろいろあるが、おそらくその最大のもの一つが環境問題であることを否定できる人はいないであろう。温暖化、様々な汚染や廃棄物、挙げればきりがなし。では、この深刻な環境危機を乗り越えて、二十一世紀も人類が人間らしく生きられる世界を守るにはどうしたらよいだろうか。これには、さまざまな意見が

あるが、環境危機を乗り越える条件として、少なくとも次の二つが挙げられるであろう。

環境危機に対処する科学技術を開発すること。たとえば、ごみ処理の新技术や新しい二酸化炭素を排出しないエネルギーの開発など。

環境に優しい技術に価値を認め、環境に優しく行動すること（たとえ画期的な技術革新によってごみ処理能力が二倍になったとしても、排出量が10倍になってはどのような、ごみを出さないライフスタイルの確立こそが肝心なのである）。

ここで考えていただきたいのは、環境危機に対処できる新しい科学技術を開発するよりも、むしろ、ほんとうに難しいのは、多くの人間が一致して環境に優しく行動することだという点である。わたしたちは、頭では分かっている、行動できないことが少なくない。たとえば、最近夏には記録的な暑さになることが多いが、エアコンの温度設定を二度下げれば環境への負担が少ないことがわかっている、なかなか実行できない。これが多くの日本人の実情ではないだろうか。

では、どうしたら環境に優しく行動できるのだろうか。大切なのは、環境に優しいライフスタイル、他の生き物との共生こそがすばらしいということに、まず、一人一人が気づき、多くの人とその考えを共有することである。そしてさらに言えば、無理に欲望を抑え込むのではなく、いわば肩肘を張らなくとも自然体で環境に優しく行動できることであり、環境に優しいのは気持ちがよい、環境に優しいはかっこいいということになれば、申し分ない。

環境問題で問われているのは、まさにわたしたち人間の感性なのであって、ここにこそ、宗教の出番がある。聖書の教えの内容が神の創造した共に支え合って生きる世界のすばらしさであるとするならば、キリスト教という宗教の役割は、環境（共生する世界）に優しく行動できるような感性を育て、みがくことにあるはずである。環境に優しい感性を持った人間にこそ、新しい環境に優しい科学技術を発展させることが可能なのであり、ここに環境危機を乗り越えるチャンスがあるのではないだろうか。

宗教は環境に優しいマインドを育て、科学はそれを実現する技術革新を行う。これは、現在科学と宗教に求められている協力の具体例の一つである。大切なのは、宗教と科学が対立することではなく、むしろそれぞれが自らの役割を自覚し協力し合うことであり、ここに人類と地球の未来がかかっていると言っても過言ではない。しかし、実はこれまでキリスト教は、環境問題に対し宗教として果たすべき役割を十分自覚してこなかった。それゆえ、キリスト教にこそ、その過去の過ちを改め、新しく出発し直すことが求められている。キリスト教思想研究において、最近、キリスト教と科学の協力や対話といったテーマが注目されてきていること背景には、以上のような問題意識が存在しているのである。

現在、危機的な現実の中で、とくにキリスト者に求められているのは、宗教と科学の過去の対立を越えて、新しい協力のために努力することなのではないだろうか。

（『信徒の友』2005.7）

（1）環境論から、ヴィジョンの意義 - 行動を動機づけるもの -

Donella H. Meadows et al., *The Limits to Growth*, Universe Books 1972.

Donella H. Meadows et al., *Beyond the Limits*, Chelsea Green Publishing Company 1992.

Chapter 8 Overshoot but Not Collapse

The First Two Revolutions: Agriculture and Industry

The Next Revolution: Sustainability

We don't know what will be enough. But we would like to conclude this book by mentioning five other tools we have found helpful, not as the way to work toward sustainability, as some ways that have been useful to us. We are a bit hesitant to discuss them because we are not experts in their use and because they require the use of words that don't come easily from the mouths or word processors of scientists. They are considered too "soft" to be taken seriously in the cynical public arena. They are: visioning, networking, truth-telling, learning, and loving. (223f.)

Visioning means imagining, at first generally and then with increasing specificity, what you really want. That is, what you really want, not what someone has taught you to want, and not you have learned to be willing to settle for.

Some people would never admit their vision, for fear of being thought impractical or "unrealistic." ... That's fine; they are needed too. Vision needs to be balanced with skepticism.

Vision without action is useless. But action without vision does not know where to go or why to go there. Vision is absolutely necessary to guide and motivate action. More than that, vision, when widely shared and firmly kept in sight, brings into being new system. (224)

We mean that literally. Within the physical limits of space, time, materials, and energy, visionary human intentions can bring forth not only new information, new behavior, new knowledge, and new technology, but eventually new social institutions, new physical structures, and new powers within human beings. (224-225)

A sustainable world can never come into being if it cannot be envisioned. The vision must be built up from the contributions of many people before it is complete and compelling. As a way of encouraging others to join in the process of visioning, we'll list what we see, when we let ourselves imagine a sustainable society that we would like to live in. (225)

Sustainability, efficiency, sufficiency, justice, equity, and community as high social values.

Leaders who are honest, respectful, and more interested in doing their jobs than in keeping their jobs.

Material sufficiency as security for all.

Work that dignifies people instead of demeaning them.

An economy that is a means, not as end, one that serves the welfare of the human community and the environment,

Greater understanding of whole systems as an essential part of each person's education.

Decentralization of economic power, political influence, and scientific expertise.

Some way of exerting political pressure on behalf of grandchildren.

High skills on the part of citizens and governments in the arts of nonviolent conflict resolution.

relevant, accurate, timely, unbiased, and intelligent information, set into its historic and whole-system context. (225-226)

(2) 聖書の終末論的ヴィジョン

イザヤ書 11 章

6 狼は小羊と共に宿り / 豹は子山羊と共に伏す。子牛は若獅子と共に育ち / 小さい子供がそれらを導く。7 牛も熊も共に草をはみ / その子らは共に伏し / 獅子も牛もひとしく干し草を食らう。8 乳飲み子は毒蛇の穴に戯れ / 幼子は蝮の巣に手を入れる。9 わたしの聖なる山においては / 何ものも害を加えず、滅ぼすこともない。水が海を覆っているように / 大地は主を知る知識で満たされる。

(3) ヴィジョンの共有と共感

第一ヨハネ 4 章

16 わたしたちは、わたしたちに対する神の愛を知り、また信じています。神は愛です。愛にとどまる人は、神の内にとどまり、神もその人の内にとどまってください。17 こうして、愛がわたしたちの内に全うされているので、裁きの日に確信を持つことができます。この世でわたしたちも、イエスのようであるからです。18 愛には恐れがない。完全な愛は恐れを締め出します。なぜなら、恐れは罰を伴い、恐れる者には愛が全うされていないからです。19 わたしたちが愛するのは、神がまずわたしたちを愛してくださったからです。20 「神を愛している」と言いながら兄弟を憎む者がいれば、それは偽り者です。目に見える兄弟を愛さない者は、目に見えない神を愛することができません。21 神を愛する人は、兄弟をも愛すべきです。これが、神から受けた掟です。

Max Scheler, *Wesen und Formen der Sympathie* (Gesammelte Werk Bd.7)

Sympathie, Mitgefühl, Liebe

(4) A . シュヴァイツァーと「生命への畏敬」の倫理

Albert Schweitzer, *Gesammelte Werke in fünf Bänden*, Buchclub ex libris Zürich

, Albert Schweitzer. Werke aus dem Nachlaß, C.H.Beck

Die Weltanschauung der Ehrfurcht vor dem Leben, Kulturphilosophie III (1999)

, Strassburger Predigten (hrsg.v.Ulrich Neuenschwander), C.H.Beck 1966

, Was sollen wir tun ? 12 Predigten über ethische Probleme, Lambert Schneider

1974

金子昭 『シュヴァイツァー その倫理的・神秘主義の構造と展開』(白馬社)

武藤一雄 『神学と宗教哲学との間』(創文社)

芦名定道 「シュヴァイツァーと現代神学の生命観」(『シュヴァイツァー研究』第22号 1997)

1) シュヴァイツァーの問題意識

Albert Schweitzer, *Gesammelte Werke in fünf Bänden*, Buchclub ex libris Zürich

, Albert Schweitzer. Werke aus dem Nachlaß, C.H.Beck

Die Tragödie der abendländischen Weltanschauung

Geschichte des Ringens um Weltanschauung zu finden

Weltanschauung, aus der allein tiefe und umfassende Kultur kommen kann

Welt- und Lebensbejahung (99)

aber es gelang ihm nicht, die welt- und lebensbejahende, ethische Weltanschauung
überzeugend und dauernd aus dem Denken zu begründen.

kamen wir in Weltanschauungslosigkeit und damit in Kulturlosigkeit hinein. (100)

Meine Lösung des Problems ist die, daß wir uns entschließen müssen, auf die
optimistisch-ethische Deutung der Welt in jeder Weise zu verzichten. (104)

Niedergang der Kultur (117)

Das Große der Menschen des Aufklärungszeitalters liegt darin, daß die Ideale der
Vervollkommenung des einzelnen und der Gesellschaft und der Menschheit aufstellen und sich
ihnen mit Enthusiasmus hingeben. (122)

Die Weltanschauung des Rationalismus ist optimistisch und ethisch.

In dem Maße, als die Weltanschauung des Rationalismus überholt wird, kommt der
Wirklichkeitssinn zur Geltung, bis zuletzt, von der Mitte des 19. Jahrhunderts ab, die Ideale nicht
mehr der Vernunft, sondern der Wirklichkeit entnommen werden und wir damit immer weiter in
Kulturlosigkeit und Humanitätslosigkeit hineingelange. (123-124)

Gemeinsam ist beiden, daß sie elementare Ethiker sind. Sie betreiben nicht abstrakte
kosmische Spekulationen. Ethik ist ihnen ein Erlebnis des Willens zum Leben. (291)

die Weltanschauung der höheren Lebensbejahung (301)

ニーチェが「生きんとする意志」から議論を開始することは正しいが（単なる生否定
としての他者への献身は欺瞞的である）、「生肯定自体はいかに方向転換しようとも、高
次の生肯定ではなく、常にただ強められた生肯定に過ぎない」（他者への献身を否定する
超人）。「生きんとする意志」は生否定を統合する高次の生肯定（精神性）に高められな
い限り、倫理の根本原理とはなり得ない。問題は、いかにして、生きんとする意志を自己
犠牲（他者への献身）と媒介し、精神性のレベルへと高めるかである。（304-305）

seine unbefangene Welt- und Lebensbejahung sich in eine überlegte wandeln muß. (346)

In vertiefter Welt- und Lebensbejahung bekunde ich Ehrfurcht von dem Leben. (347)

Welt- und Lebensbejahung und Ethik sind in unserem Willen zum Leben gegeben. (106)

Ehrfurcht vor dem Leben geht mein Erkennen in Erleben über.

Die Ethik wächst mit der Welt- und Lebensbejahung aus derselben Wurzel hervor. ... Die
Ehrfurcht vor dem Leben gibt mir das Grundprinzip des Sittlichen ein. (108)

einen neuen Weg zur Weltanschauung zu beschritten

der Glaube an die neue Menschheit

Eine neue Renaissance muß kommen. (114)

2) 「生命の畏敬」の神秘主義

Aus innerer Nötigung, ohne den Sinn der Welt zu verstehen, wirke ich Werte schaffend und Ethik ühend in der Welt und auf die Welt ein. Denn in Welt- und Lebensbejahung und in Ethik erfülle ich den Willen des universalen Willens zum Leben, der sich in mir offenbart. Ich lebe mein Leben in Gott, in der geheimnisvollen ethischen Gottespersönlichkeit, die ich so in der Welt nicht erkenne, sondern nur als geheimnisvolle Willen in mir erlebe.

Das voraussetzungslose Vernunftdenken endet also in Mystik. Sich zu den vielgestaltigen Erscheinungen des Willens zum Leben, die miteinander die Welt ausmachen, in der Gesinnung der Ehrfurcht vor dem Leben zu verhalten, ist ethische Mystik. Alle tiefe Weltanschauung ist Mystik. Das Wesen der Mystik ist ja, daß aus meinem unbefangenen naiven Sein in der Welt durch das Denken über das Ich und über die Welt geistige Hingebung an den geheimnisvollen unendlichen Willen wird, der im Universum in der Erscheinung tritt. (109)

Welt- und Lebensbejahung und Ethik sind irrational. Sie sind in keinem entsprechenden Erkennen des Wesens der Welt gerechtfertigt, sondern sind die Gesinnung, in der wir unser Verhältnis zur Welt aus der inneren Notwendigkeit unseres Willens zum Leben bestimmen.... In jeder Hinsicht sind also Welt- und Lebensbejahung und Ethik irrational. Wir müssen den Mut haben, es uns einzugestehen.

Alle wertvolle Überzeugung ist irrational und hat enthusiastischen Charakter, weil sie nicht aus dem Erkennen der Welt kommen kann, sondern aus dem denkenden Erleben des Willens zum Leben aufsteigt, in dem wir über alles Welterkennen hinausschreiten. (110)

Der Weg zur wahren Mystik

die Mystik der Ehrfurcht vor dem Leben (111)

Ehrfurcht vor dem Leben ist Ergriffensein von dem unendlichen, unergründlichen, vorwärtstreibenden Willen, in dem alles Sein gegründet ist. (347)

- 1 . 内的直観によって、自己の内に「生きんとする意志」を見いだす（素朴で本能的な生肯定）
- 2 . 自己の内だけでなく、自分の周りの多様な生命体全てに、生きんとする意志が備わっていることを類比的に承認する。類比を通じた共感。他の生命体の生肯定を共感的に承認することは、単なる生からの逃避や人生放棄とは異なった形態における生否定を含む。
- 3 . 深められた生肯定としての生命への畏敬
生肯定と生否定との統合、自己完成と献身との統合
利己主義と利他主義との統合

Instinktive Ehrfurcht vor dem Leben ist in uns. (343)

in Analogie zur Lebensbejahung, die in ihm selber ist,
mitzuerleben (356)

Selbstvervollkommung / Hingebung

(5) キリスト教神秘主義の意義

1) キリスト教と神秘主義

金子晴勇 『ルターとドイツ神秘主義』(創文社)

Peter Biller and A.J.Minnis (eds.), *Medieval Theology and the Natural Body*, York
Medieval Press 1997

キリスト教にとって、神秘主義とは何か？

キリスト教信仰の頂点としての神秘主義

キリスト教信仰の墮落としての神秘主義

Paul Tillich, *The Significance of the History of Religions for the Systematic Theologian*

1966, in: *Paul Tillich. MainWorks* 6, de Gruyter 1992

Paul Tillich, *A History of Christian Thought*, Simon and Schuster 1972

Bernard of Clairvaux:

These two forms of mysticism must always be distinguished: concrete mysticism, which is mysticism of love and participating in the Savior-God, and abstract mysticism, or transcending mysticism, which goes beyond everything finite to the ultimate ground of everything that is. When we examine these two forms, we can say that at least for this life Bernard's mysticism stands within the Christian tradition.... In any case, the decisive thing is that in Bernard there is something different than in Pseudo-Dionysius, and this is his concrete mysticism, Christ mysticism, love mysticism. It is still mysticism, because mysticism is participation, and participation involves partial identification. (174-175)

2) ノーリジのジュリアン

Julian of Norwich, *Revelations of Divine Love* (Short Text and Long Text), Translated by
Elizabeth Spearing, Penguin Classics 1998

F.C.Bauerschmidt, Julian of Norwich --- Incorporated, In: *Modern Theology* 13:1 January 1997
Blackwell

several centuries of neglect , modernization

We know virtually nothing about her except the meager information that she herself gives us: born probably in early 1343, she fell ill in May of 1373 and was the recipient of a series of sixteen vision, or "showing", upon which she mediated for at least the next twenty years of her life. (76)

to modernity's construction of the category "mysticism" and Julian's location under that rubric. Such a positioning brackets Julian's historical situatedness in all its medieval and anchoritic peculiarity and gives to her a universal availability. (76)

Here we see not only the classic modern antinomy of the individual and social, but also of feeling and thought. (79)

By locating individual experience as the proper realm of Julian's revelation, Thouless effectively "disincorporates" her, both by removing her from her own time-and-place situated historicity, and by severing any connection between the revelation and those for whom Julian

believed it was intended, her "even-christians," the Body of Christ "in which all his members are knit," in which "he is not yet fully glorified nor all impassible" (XXXI.63). (80)

Any difference between religious traditions is merely the diverse expression of an essentially identical religious experience. This is particularly the case with "mysticism". (80)

No doubt Armstrong sees herself walling Julian up for her own good, placing her in a protected sphere of interiority-self-affectivity-experience, safe from the forces of history-politics-intellect-doctrine. (82)

we might do well to question the simple dicotomies that Armstrong sets up between inner and outer, individual and social, mysticism and politics. Christian belief in the incarnation of God --- the "incorporation" of God in the unique person Jesus Christ and in his Body the Church --- sunders all such dichotomies. What Christ establishes is not the possibility of individual redemption, but the possibility of restored communion: the communion of human beings with God and a communion of human beings with each other. In other words, salvation is social; (82)

corporeality: three senses in which corporeality is central to Julian's visionary experience and the theology that grows out of it

1. Julian's vision is the body of Jesus, crucified and risen. This body is the "text" that she must interpret.
2. Julian understands Christ's saving work as reuniting our "substance" and our "sensuality" --- complex terms that indicate respectively the higher and lower aspects of the human soul.
3. Julian's revelation is intended for her "even-christians", her fellow members of Christ's body who suffer still on earth. (83)

Elizabeth Ruth Obbard, *Introducing Julian. Woman of Norwich*, New City Press 1996

If I look at myself alone, I am nothing at all, but in the whole body of Christ. I am, I hope, united in love with all my fellow-Christians (RDL ch.8.6, ch.9.1)

Julian is the acknowledged 'first lady' of written English. (32)

Above all, there is the wonderful picture of God's motherly caring. (40)

God is as truly our mother as he is our father. (45)

At this time I was not shown the working of God's creatures, but only the working of God in is creatures. He is at the centre of all, and he does everything. (56)

The human mother can put her child tenderly to her breast, but our tender mother, Jesus can lead us intimately into his blessed breast, though the sweet open wonder in his side, and there give us a glimpse of the Godhead and the joy of heaven, with the inner certainty of eternal bliss. (RDL ch.24, ch.60.6)

I saw how Christ has compassion on us because of sin. , so I was now full of compassion for all my fellow-Christians. (79)

Mercy is a property full of compassion, which belongs to motherhood in tender love. Grace is a property full of glory which belongs to royal lordship in the same love.... this is from the abundance of love, for grace transforms our dreadful failing into plentiful and endless consolation. And grace transforms our shameful falling into a high and glorious rising. And grace transforms our

sorrowful dying into a holy and blissful life.(RDL ch.48.2-4)

our precious mother Jesus can feed us with himself, and he does this most constantly and tenderly by means of the Blessed Sacrament, which is the precious food of true life. (110)

3) キリスト教的なエコ・フェミニズム

Sallie McFague 「女性性 - 身体性 - 自然」

The Body of God. An Ecological Theology, Fortress 1993

traditional sacramentalism

the model of the world (universe) as God's body means that the presence of God is not limited to particular times or places but is coextensive with reality, with all that is.

The great theologians and poets of the Christian sacramental tradition, including Paul, John, Irenaeus, Augustine, the medieval mystics (such as Julian of Norwich, Meister Eckhart, Hildegard of Bingen), Gerard Manley Hopkins, and Pierre Teilhard de Chardin, love the things of this world principally as expressions of divine beauty, sustenance, truth and glory. (184)

An incarnational theology assures us as well that we are not alone in loving the bodies of our planet. I close with two brief readings that have helped me. The first is by the medieval mystic Julian of Norwich and could be seen as a meditation on that lovely spiritual, "He's got the whole world in his hands."

a hazelnut, I looked at it with my mind's eye and I thought, 'What can this be?'

In this little thing I see three truths. The first is that God made it. The second is that God loves it. The third is that God looks after it. What is God indeed that is maker and lover and keeper. I cannot find words to tell. (212)

<文献>

- ・尾関周二編 『エコフィロソフィーの現在 自然と人間の対立をこえて』大月書店
- ・岡本裕一郎 『異議あり！ 生命・環境倫理学』ナカニシヤ書店